

「父に求めよ」

開会聖句 ヘブル人への手紙 4章16節

「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折りにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

はじめに

日曜日の夜は「どうする家康」を見るのが楽しみです。先週は夕方映画に誘われ、映画を見に行きました。「君たちはどう生きるか」という、封切り直後の宮崎駿監督の新作です。このタイトルの本は戦前の軍国主義の時代に子ども向けに書かれた小説ですが、6年前に漫画化されて有名になりました。映画の内容そのものは監督のオリジナルでしたが、この本に刺激を受けて作られたことはわかりました。彼は一度引退を表明しましたが、撤回し、80歳を超えた年齢でこの映画を作ったそうですから、彼なりの次世代へ問いかけだろうと思います。

翌日の聖書日課はエレミヤ5章で、こんな1節が目にとまりました。「結局、あなたがたはどうするつもりなのか。」(31) 神さまは預言者エレミヤを通して、神の民としての生き方を見失い、好き勝手に生きる彼らに、繰り返し警告をされます。神さまは本気で民を心配し、「あなたがたはどうするのか」と悔い改めを迫られます。結局、民は警告を無視し、神さまはご自分のメシアによって新しい神の民を生まれさせました。今日は告別説教の最後で、イエスさまは、弟子たちが味わう喜びについて話をされました。主題は「誰にも奪い去られない喜び」。

本論

I. 弟子たちの嘆き悲しみは、誰にも奪われない喜びに変わる

ことは、過越の祭の前日、イエスさまが弟子たちの足を洗い、ユダが遂に裏切りを決行したところから始まりました。彼の出番はヨハネ福音書ではそこまでですが、マタイ福音書27章には彼の最後までが記されています。彼はイエスさまを銀貨30枚で売り渡した後、死刑判決にショックをうけます。「無実の人の血を売って罪を犯した」と、取引した祭司長たちに談判しますが、はねつけられ、哀れな死を遂げます。世間の空気に敏感であったユダでさえ、指導者たちの悪意の大きさには気づいていなかったのです。まして、残りの11人にはその緊迫感は伝わらず、ただ、イエスさまが目の前からいなくなることへの不安にのみ囚われていました。イエスさまはそれに気づき、19節「イエスは彼らが何かを尋ねたがっているのに気づいて、彼らに言われた。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見る』と、わたしが言ったことについて、互いに論じ合っているのですか。」と言われました。私たちはそれが十字架と復活であることを知っていますが、御霊の注がれてない彼らはずっとそのことがわからず、論じ合っていたのです。

イエスさまは、今までのような説明「父の家に住まいを用意しに行くが、また戻ってくる」、
「助け主が遣わされる。その方は真理の御霊で、この方が全てのことを教えてくれる。」では
なく、違ったことを言われました。20～22「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたが
たは泣き、嘆き悲しむが、世は喜びます。しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。…し
かし、子を産んでしまうと一人の人が世に生まれた喜びのために、その激しい痛みをもう覚え
ていません。…わたしは再びあなたがたに会います。…その喜びをあなたがたから奪い去る者
はありません。」「まことにまことに」で始まります。イエスさまがいなくなることを弟子たちは嘆き
悲しむが、真逆に世は喜ぶのです。ユダヤ社会の統治者にとって、イエスさまはその安定を
乱す危険人物でした。今に始まったことではなく、イエスさまは赤ちゃんのときも、ヘロデ王に疎
まれ、この王が死ぬまで、家族でエジプトに避難していました。公生涯になって、メンツをつぶ
された律法学者やパリサイ人の妬み、軍事的メシアの期待を裏切った民の腹立ち、神殿を
商売(強盗の巢)の場にする者の怒りなど、人間の自己中心な思惑が複雑に絡まり合い、
巨大な悪の力となり、イエスさまをこの世から追い出してしまいました。ヨハネ序文 1:11「この
方のご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受入れなかった。」の通りです。

しかし、イエスさまは再び弟子たちに会われるので、そのときには今の悲しみは喜びに変わる。
そのことを出産の苦しみにたとえて説明されました。出産の激しい痛みを通過して、一人の
人が生まれた喜びがくるように、弟子たちも、誰にも奪われない喜びに満たされるという
のです。イエスさまが告別説教の最後に伝えたことは、彼らの嘆き悲しみが誰にも奪い去られ
ることのない喜びに変わるということでした。そして、もう一つ気づかされることがありました。十
字架を目前にしているイエスさまも、産みの苦しみの半ばにおられるのではないかと思ったので
す(12:27)。イエスさまは、弟子たちがイエスさまと再会する日のことを、23と26節で「その日
には」と2回に分けて話されていますが、この日には、弟子たちの喜びの他に、イエスさまにと
っても大きな喜びの日になります。それはイエスさまの願いが実現する日だからです。

II. 誰にも奪われない喜びとは、父との交わりに入れられること

実は、告別説教の中で、まだふれていない話題があります。2回とばしてきました。1度目
は、14:13「わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげま
す。」2度目は15:16b「あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与え
てくださるようになるためです。」で、わたしの名によって求めなさいという命令です。そしてここ
23節では「その日には…まことに、まことに…。わたしの名によって父に求めるものは何でも、
父はあなたがたに与えてくださいます。」まだ違いがわかりませんね。では、26節「その日には、
あなたがたはわたしの名によって求めます。あなたがたに代わってわたしが父に願う、と言
うのではありません。」後半に違いがあります。イエスさまが弟子たちに代わるのではなく、弟子
が父に願いなさいと言われてます。私たちは、クリスチャンに成り立ての頃、公式のように、イ
エスさまの御名によって、父なる神に祈ることを教えられました。それは、私たちの祈りが一旦

イエスさまに届き、イエスさまが神さまに届けてくださるという代理のニュアンスをもっています。確かに、イエスさまには、代理とか仲介という大切な働きがあります。しかし、ここで「あなたがたに代ってわたしが父に願うのではない。」ときっぱり否定されました。それは、父を前にして、私たちはイエスの背中に隠れている存在ではなく、イエスの横に並び立つ存在だと言いたいのではないでしょうか。1:12「しかし、この方を受入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。」にあるように、神の子とされたということだと思います。27 節「父御自身があなたがたを愛しておられるのです。あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のもとから出てきたことを信じたからです。」ここでも、父御自身が愛してくださるのは、イエスさまの背後にいて姿の見えない私たちではなく、父の御前にいる一人一人の個性豊かで、イエスさまの愛(アガペー)によって結ばれている私たちだと思います。

今日の開会聖句はヘブル 4:16「ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折りにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」ヘブル書にはイエスさまは私たちのためのとこしえの大祭司で、ご自分をたった一度献げて罪のなだめをしてくださった(ヘブル 9:26b)ことが説明されています。共観福音書の十字架の場面には、イエスさまが息を引き取られたとき、神殿の幕が真っ二つに裂けたと記されています。16 節の勧めは、幕が存在しないから出来ることなのです。特別な日でなくても、祭司でなくても、犠牲の動物を持たなくても、神殿でなくても、神の前に出るすることができます。むしろ積極的にそうなさいと、ヘブルの著者は勧めています。イエスさまの産みの苦しみは、新しい神の民、神の子とされたクリスチャンを生みました。私たちは父とイエスさまの親しい関係の中にいます。ですから、その父に「アバ、父よ」と親しく呼びかけることをイエスさまは教えてくださいました。それこそ、イエスさまの願いでしたし、父の命令でした(12:50)。イエスさまが伝えたかった2つめのこと、**誰にも奪い去られることのない喜びとは、父と子の交わりに入れられること**です。

私の父は普段は口数の少ない人でしたが、アルコールが入ったら喋ります。そんな時に、話していた私の幼い頃のエピソードがあります。近くのデパートへ行きましたが、エスカレーターを上った付近で、私は一瞬迷子になつたらしく、大声で「おとう」と父を呼んだそうです。父の話しぶりでは、それはとても恥ずかしかつたことで、もし私が「お父さま」、「パパ」とか、せめて「おとうちゃん」と呼んでいたら、記憶に残らなかつたかもしれません。それでも、恥ずかしくても、飛んできてくれたのでよかつたです。肉の父親は少々不完全なところがあります。が、天の父はそうではないでしょう。「アバ父」と呼び求めれば、喜んで耳を傾けてくださると思います。

終わりに

「あなたがたはどうするのか」への私なりの答えを考えてみました。今週も色々なことに私たちは出くわし、そのできごとに一喜一憂するでしょう。しかし、私たちは神の子とされた特権をしっかり握り、大胆にイエスさまが用意してくださった恵みの御座に近づこうと思います。